
ワスレモノ

度会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワスレモノ

【Nコード】

N8349X

【作者名】

度会

【あらすじ】

何かの音で目が覚めた。

俺こと東雲彬は部屋の天井を見ていた。

体に何かが乗っているという圧迫感を感じた。

その何かを俺は凝視する。

この夏俺は彼女に魅入られた。

ブログ（前書き）

パソコンをいじってたら見つけました。

未完成のまま残っていたので、反響がありましたら随時書いていきたいと思っています。

ブローグ

何かの音で目が覚めた。

時計は見える所に見当たらないのか、正確な時間は分からないがそろそろ日付が変わる位なのだろうか、不意に目が覚めた。

体の感覚という感覚を失っていた。

自分の肉体と脳が酷く距離があるものに感じた。

脳が命令を送ってもピクリとも反応しなかった。

まるで、神経自体に絶縁テープをぐるぐる巻きにされているような感じ。

全ての感情が不快という感情で満ち溢れていた。

しかし、俺の視界上では俺の胸の上に何かが乗っているように見える。

そのせいで体が動かないのかもしれない。

俺は漠然とそう思った。

意識をそこに集中させると少しだけ感覚が繋がった気がした。その僅かな感覚に全神経を集中させているためか、俺という存在をはその部分に集約される。

「っひゃ」

自分が突然ザラリとした感触に包まれた。未知の感覚に反射的に情けない声が出る。

まるで猫に咀嚼される餌のようだ。餌に感覚があるかということとは別として。

人間は脳にだけ意識が集中するとそんなことを考えるのかとその場に似合わないことを考える。

咀嚼され続けていると突然自分自身がまるで爆発を起こしたかのように瞬間的俺の体が自由になった。

ようやく動くようになった首を動かしてそのナニかに目を向けた。

暗いのは体が自由になら前と変わらず暗いままだったため人型の
ような物しか乗ってるようにしか見えなかった。

目が暗闇に慣れてきたのかまだその影の姿が朧気ながら見えてき
た。

年端のいかないうな少女のようにも老婆にも見えた。

俺のその視線に気がついたのかソレは目線を向けた。

- - - 大丈夫だよ。私がついてるから

幼い声だった。

少なくとも老婆の類ではなかった。

何が大丈夫なのだろうか。

そう発した俺の声はひゅっと擦れて彼女に届く前にスッと霧散し
た。

彼女が立ち上がると月明りに彼女が照らされた。

やはり少女だった。

俺はその格好を見て絶句する。

目の前の少女の衣服、顔、そしてその体が赤い色の何かに濡れて
いたのだ。

その赤い液体はポタポタとまだ固まることなく俺の服に赤い赤い
シミを作っていく。

この液体がケチャップやら、赤い絵の具だったらいいな。そんな
ことはないだろう。

思わずそんな風に楽観的に物事を捉えてみたりしてみようとして
みたがやっぱり無理だった。

しかし、ならば説明がつかないことがあった。

もし、痛覚がマヒしているなら話は別だが、俺の体はどこからも
血は出ている様子はなかった。

それどころか怪我をしている様子もない。

かすり傷一つないというのは今思えば不気味な話だったが、あの

状況ではそんなマトモな感情は働いていなかった。

俺が自分のおかれた状況を確認している間に彼女は俺の体をベロリと舐めていた。

その容姿に沿わないような乱雑な舐め方で俺の体を胸から上の方へどんどんと舌が進んでくる。

少女の舌の感触は人のソレというよりどちらかと言うと猫や他の肉食獣のソレに近かった。

ザラリとした感触。

彼女が舌を動かす度に自分の何かが削られていく感触。

ザラリ、ザラリとまるでヤスリで削る音が脳髓まで響く。

そんな彼女の姿を見て俺は、あたかも俺を自分のものと主張しているようだ。と他人事のように感じた。

「お前は……」

俺の体によりやく意識が通るようになってきたのか、口を微かに動かして俺の眼前にいる少女に尋ねた。

「あ、私？」

話かけられた少女は、さもそんなことを聞かれるのが予想外であるかのように目を丸くして自分のことを指差す。

いや、もし違うのなら俺は誰に聞いているのか教えて欲しいところだ。

私は、……だよ。

彼女が口を開くと同時に意識が暗闇に吸い込まれていく。

薄れゆく意識の中で俺は彼女の唇の動きだけを見つめていた。

プロローグ（後書き）

読了感謝です。

温かい目で見えていただければ幸いです、

十月十九日（前書き）

とりあえず話の流れが分かるところまで更新していきたいと思います。

十月十九日

記憶を辿ってみると、あんな目にあつたのはもう2か月も前の話だ。あの時の少女はあれつきり見ることはなく、きつと極限状態のせいで見た幻だろうと自分に言い聞かせた。

今はようやく、身辺の整理が済んできたところだ。

ちなみに今まで住んでいた家売り払うことにした。

これは病院で目覚めた時にもう決めたことだった。

漠然とだが両親はもうこの世にはいないだろうという予感があったのだ。

そして案の定二人ともいなくなっていた。

もちろん今住んでいる家は両親と共に暮らした場所でもあるし、思い出だつてそれなりにある。

ならば売る必要はないじゃないかと思う人がいるかもしれない。理由は簡単だ。大きすぎるのだ。

今まで四人で暮らしていた我が家は一人で暮らすのは広すぎる。

それに、維費も学生の身分には不釣り合いなくらいだ。

ならばいつそ売ってしまえばいいという結論に至ったのだ。

というか、俺は、両親たちが死んだことに大した感情を抱いていなかった。

これはどういうことだろうか。

医者や警察の話によるとまだ両親の死を受け入れていないのではないかということだった。

受け入れてはいた。

もう両親は死んだことは理解した。

その上で何も感じないのである。

そんな自分の感受性のなさに少々嫌気が差しながらも俺はある考えに至る。

やはり、あいつのせいなのか？

一瞬そんな考えがよぎったが、アレは幻のはずだ。

そんなものに頼るのは筋違いだと考え直す。

家を売るということで、俺が挨拶に行ったのだが、行く先々でそれぞれ困ったような顔をしながら、

皆一様に『この度は……』から始まり、テレビでみるような台詞を吐いた後に、『お氣をつけて』という言葉で会話を締めくくったような挨拶を返した。

やはり正直な話死んだ人の親族が来ても対応に困るのだろう。

あらかた挨拶が終わると上着のポケットに入っていた携帯が光っていることに気がついた。

こんな時間に誰だろうか？ そう思いながら携帯を取り出した。

「げ」

見ると着信の他にメールが数件来ている。

携帯のディスプレイには頼田修一と土岐堂義成という名前がそれぞれの受信時刻と共に記されていた。どうせこいつらのことだから大方大したメールではないだろう。

そう思って携帯を操作してメールを開いた。

『よう。生きてるか？』

それだけだった。

本当にそれだけだった。

もしかしたらオープンスペースの下にメッセージでもあるかと探したがそんなこともなかった。

土岐堂の方はもう少しマシな内容だったが、大して面白くないのでここでは割愛しておくでしょう。

だって大学の講義の話がされても気が滅入るだけだし。

どうやらこの二人以外にもう一通メールが来ていることに気がついた。

そのメールを開く。

「新さんか……」

送信者の名前の欄に『新さん』と表示されていた。

新さんは俺のバイトしている古本屋の店長である。

べつに古本屋の店長だからといって漫画やら小説に出てくるような頑固者の親父などではない。

むしろ俺達と四、五歳しか変わらない位かもしれない女性だ。

個人的な感性なのだが、新さんは美人の部類だと思う。

そついやバイトにはあの事件のせいで、最近行けていなかったことに気づいた。

まあ、あの人の性格上そんなことでは怒らないと思う。

怒るのに力を使うのが面倒だからと、俺のことなど無視しているだろう。

だから今メールが来たことが余計に怖いのだった。

「まさか……このままクビにするとかだったらヤバいな」

今このご時世に働き口を失うのははつきり言って辛い。

今は、金はあるけど働かなければそんなもの簡単に食い潰してしまっただろう。

俺は恐る恐るメール開く。

『心が落ち着いたら出てこい。今来たとしても、放心状態のキミは役立たずだからね』

そつ書いてあった。

普通にいい人だった。

『P S：早く来なかったら、別の人でも雇うから』とも書いてあった。

向こうも商売なんだから、いつまでも来ない奴なんかいらぬのは当たり前だけどさすが新さん。

面と向かつては言わないけど遠まわしに来なきゃクビだって言ってる気がする。

しかしながら、こうしてメールをくれるだけまだ必要とされているみたいなので今はよしとしよう。

全てのメールを見終わると最後のメール以外は大きくして意味が無かった。なので全部削除していい。

携帯から目を離して上着のポケットに携帯をしまう。

顔を上げるとまだ景色はいつもの見慣れた風景だった。

俺がいつも通ってる道。

よく見る家。

電信柱。

全てがいつも通りそこに佇んでいる。

だけど何かが違う気がした。

そうだ、静かなのだ。

今の時間帯は普段なら学校帰りの小学生などが遊びに出ていたり、買い物帰りのおばさん達が道端で井戸端会議をしている時間帯のはずなのだ。

空を見上げてみても別に今日は天気が悪いわけではない。

むしろ良好と言っても差支えないだろう。

ただなんと表現していいのかわからない。

しかし、ここは住宅地なのにもかかわらず人が住んでいる気がしないのだ。

ふと一軒の家が目についた。

別に俺に靈感あつてピンピン来るとか、虫の知らせとかいうわけではなく単純に中の住人が生活している音が聞こえたからだ。

普段だったら気にしない程度の音なのだが、この異様とも言える雰囲気の中では日常の音がかえって異常な音に聞こえた。

その家は塀に覆われていて中の様子をうかがい知れることは出来ない。

しかし、何かを焼いているのかジュージューと炒めているかの音が聞こえた。

「なんだ、気のせいかな」

いや、気のせいじゃない。

俺は自分の考えを否定する。

この違和感は拭きたい。

その言葉通りに、俺はピンポンとインターフォンを鳴らした。しかし、空しく音が返ってくるだけで中の人が一向に応答してくる気配がない。

「居留守でもしてるつもりか？」

それとも、忙しくて手が離せないのかもしれない。

料理の途中では来客に対応しにくいだろう。

そう思っただけ俺は玄関前で暫く待った。

「しょうがないなあ」

俺はなんとなく家の敷地に足を踏み入れた。

その時は、ただ、なんとなく家のドアに手をかけていた。

もし警察に通報されたら捕まってしまう。そんな考えもなかった。多分この時は分かっていたんだ。

通報されることわけがないことを。

ドアはドアノブを捻ると大して力を入れることなく簡単に開いた。かくしてこのAさん（仮称）の家に侵入することに成功してしまった。った。

Aさん（仮）さんの家は外の塀にふさわしい内装だった。

玄関に入る時チラッと駐車場を見たが、生憎俺は車には興味がないので車種は知らないが、高級そうな車だった。

それに、この家を見れば分かることだがここの家主は金持ちだろう。

そういうことなので律義に玄関で靴を脱ぎ板張りの床に足を忍ばせる。

最悪家人が出てきたら素直に謝って許してもらおうと思っていた。玄関を含め家の中は全体的に暗かったが入って右手の方の部屋の扉からはぼんやりと光が漏れていた。

その部屋はおそらくリビングであり、そこから俺が聞いたなにかを焼く音が今でも聞こえている。

誰もいないならともかく、そろそろ気づいて欲しい。

そんな願いは空しく家に入って二、三分経つても誰かが俺を発見することはなかった。

「うーん」

と、一人で唸ってみても自体はまるで好転しない。

やっぱり若さ故の過ちだ。

今この家に入ったことをもの凄く後悔していた。

多分俺の人生の中で一番か二番目に後悔した。

「どうすんだよ…… Aさん」

語りかけても返事は返ってくることは無かった。

何故なら、Aさん（仮）は俺の目の前のリビングで死んでいるのだから。

「う……」

反射的に手で口を押さえた。

初めて見る死体に生理的嫌悪感を感じる。

どうやら思っていたよりこういうのに耐性がないと感じた。

この感じは一度修一の奴に人体の不思議展に無理矢理連れていかれて標本を見た時の感覚に似ていた。

はあ…… とため息をついて深呼吸をすると、ようやくその光景に慣れてきてじつくりとAさん（仮）を観察した。

勿論別に医者志望でもなんでもないし、医学知識なんかブラックジャックとかテレビドラマの知識しかないから細かいことは全然わからない。

しかし、この胸から突き出ているナイフが死因だと思う。

「臭うな」

別段そんなに近づいてはいないのだが死臭って言うのか、形容し難い匂いがここからでも鼻についた。

うーんスメルズバッド。

「家主がいないのに、なにかを焼いてる音は消えないんだ？」

ここに入ってくる前から聞こえていた何かを焼いているような音

は、家に侵入してリビングの中に踏み込んだのにも関わらず依然として鳴り続けていた。

まさか犯人がくつろいでんのか？

いやそれなら流石に入ってきた時点で俺を殺しているはずだ。

人が入ってきてまで、のんきに料理を作っているような酔狂な犯人なんているわけがない。

いたら見てみたい位だ。

まあ、酔って狂っている殺人犯はいるかもしれない。

尤も今それが見れたら生きちゃいないが、妙な好奇心がキッチンへの暖簾を静かに上げた。

「あ」

キッチンの中の人間が急にこちら側を振り向いた。

「……」

ヤバい気づかれた。

というか本当に人がいたよ。

どうしようか……死ぬ時位はかつこいい死に様を期待してたんだが、どうやら俺の人生は知らない人の家に上がり込んで偶然いた酔狂な犯人に殺されてしまうようだ。

(……よし)

俺は覚悟を決めて相手を見据えた。

「や」

「え？」

俺の口から間抜けな声が出た。てつきりいかめしい男とか、ヒステリック気味な女がいるのかと思ったら、視界に飛び込んできたのは、年端もいかない子供だった。

あれ？コイツ…

俺の目の前にいる奴は俺を見つけると嬉しそうにあどけない顔で笑いながらフライ返しをクルクルと回していた。ん？こいつどこかで……

「キミにまさかこんな所で会えるとは思わなかったよ。彬」

「お、お前……」

そのあとの言葉が見つからない。

あの時の出来事は幻じゃなかったのか？

俺の精神が病んでたんじゃないのか？

もう平穏な生活を送れるんじゃないのか？

あの時のように真っ赤に濡れた服とは違って純白のワンピースで、家人に気を使つてか裸足で、そしてあの時のまま腰まで届く位の長さの髪を揺らしながら、少女は俺の目の前に再び現れた。

その口には微笑みを張り付けて。

十月十九日（後書き）

創作つてのもまた難しいものと思ったように書くのも難しい気がします。練習あるのみです。

十月十九日―？（前書き）

続きです。

非日常って言葉の響きは素敵ですけど、
実際は起きて欲しくないものです。

十月十九日―？

「なに…してんだ？」

俺の混乱した脳はその言葉を口にするのが精一杯だったらしい。ただ目の前の少女が答えるのを待つしかなかった。

すると、少女は口を開いて、

「いやね」

そう何かを言い始めたかと思うと、少女はくるりと俺に背を向けて調理を再開した。

「私がキミのトコ行ってからあったんだよ色々ね」

おもむろに俺の方に振りかえって、少女は、後ろの棚から食器を取るように催促した。

お腹が減っててね。と少女はフライパンに向き直ると俺に背を向けて話始めた。

「とりあえず手近にあった家にでもってね」

少女は俺から皿を受け取ると、礼を言って焼いていた肉を皿に移した。

さつきから見ていると分かっていたが、この少女は今から食事をとるみたいだ。

皿に盛りつけられたのは肉だったのだが、この状況でなんの肉かは想像しなくなかった。

「ま、ちよつと忍びこんで、なんか食べ物とかを恵んで貰おうかなと思ったんだよ。そしたらさあ大変。人が死んでるじゃありませんかあ」

皿を机に置いてコイツは機嫌がいいのか両手を広げて大げさに話した

というか思っただけど、この状況ってかなり不味いよな？今見つけたらほつきり言って洒落にはならないことは事実だ。

「まあ座りなよ」

ずっと立っていた俺を不審に思ったのか少女は俺にそう促した。
俺は少女に促されるままに少女の対面の椅子に座る。

はつきり言ってこんなことしないで警察なりなんなりに任せて
逃げたい。

けれど目の前の少女は楽しそうに笑ってこっち見てくるので逆に
不気味で動くことができなかった。

「大丈夫だよ。私は犯人じゃないから」

「え？」

俺の考えていることが分かったのか先ほどまで焼いていた肉をこ
の家から失敬したナイフで器用に切って口に運びながら、あたかも
興味がないことかのように言った。

ま、実際コイツにはそんなことどうでもいいんだろうけどさ。

「ま、信じなくても私は一向に構わないけどさ、この人は私が入
ってきた時にはもう死んでたよ」

話ながら一気に大きい肉の塊を呑み込もうとしたのか、むーと頬
を膨らませて胸を叩きながら頑張っていたが、やがてようやくそれ
が呑み込めたらしい。

ぶはつと空気を吐き出して幾分か呼吸が楽になったらしく随分と
饒舌に語りだした。

「とりあえず私の今まで行動を教えてあげる。今私はなぜかとて
も気分がいいからね。キミが聞きたくないと言っても言うからね。

まず彬、キミが意識を失った後のことから簡潔に話すよ。いくら気
分が良いと言っても面倒なことはそこまで好きではないからね」
どっちだよ。

「まあ、私はあの後、彬が気を失った後救急に電話して、野次馬
が出てくる前にこそそ逃げおとしたわけなんだよ。そういえば、
キミのトコの両親はかわいそうなことになっていたらしいね」

また部屋を物色した結果なのか高級そうな湯呑になんか分からな
いけど高級そうな緑茶みたいのを飲んで一息いれていた。

「ぶはあ。いやこのお茶美味しいね。あ、ごめんごめん。話が途

切れてちゃったね。どこからだっけ？ああ、そうそうキミの両親が死んでいたって話からだね。まあキミには重要かもしれないけど、今の私の話とはあんまり関係なさそうなので省かせてもらおうよ。さて話の続きだ。はつきり言ってみての通りこの体だから、自分で生活するのは難しいんだ。まあ幸いキミの家から色々と失敬できたし、キミからも少し貰ったから飲食は問題なかったんだけどね。さてここで問題」

その少女は頬杖をついて俺を見上げた。

思わず視線を合わせると深い黒色の二つの目が俺を下から覗きこんでいた。

「なんだよ？」

「そのあとの私の行動はなんでしよう？」

少女はそう言う小さな指を一本立てた。

「一番。そのまま野良犬や鴉よろしくそこら辺を這っていた。二

番。誰かのヒモになっていた。三番。誰かの家にいた」

「普通に考えて三番だろ」

とおざなりに答えておいた。

というか他の選択肢みたいなことはしてほしくない。

大体ヒモってお前がやったら、匿った奴は犯罪者決定だろとは言わなかったけど。

「ここで残念とか言って悔しがらせてやりたい気もするけど現実はそのなにかしなことは起きないからね。正解だよ。本当に愚問だったね。というか私自身、人様のヒモになるのは好きじゃないしね。だって私にそんなこと言ってくるのはもう四、五十位のおじさんが不気味に笑って近づいてくるだけだからね」

流石、私もそれは怖いよ。

そう言う目と目を細めて、

「ま、キミならいいけどね」

その少女はけらけらと笑った。

「そうか」

無然とした態度で突っぱねると、つれないね。

少女は笑いながら最後の一切れを口に入れた。

自分の作った料理を最後まで味わうかのようにゆっくりと咀嚼すると両手を合わせてごちそうさまと言って、皿を洗いにキッチンに行った。

案外礼儀はいいのかもなコイツと場違いながらもそう思った。

「やっと警戒心を解いてくれてみたいだね。コイツなんて呼ぶなんてさ」

「……声に出てたか？」

「いや別に。そう言ってた気がただけ」と言って洗い物を終えるとまた俺のいる机に戻ってきた。

「なあ」

「ん？」

「……何の肉食ってたんだ？」

コイツが肉を食いだした時から疑問に思っていたことだった。

さっきは、はっきり言って怖かったから聞けなかった。

俺の言葉を聞くと一瞬目を丸くしたが答える代わりに俺に真っ赤な舌をだらりと出して笑った。

——舌だった。

——真っ赤な舌だ。

あの晩俺を舐めた舌に違いない。

その体軀に不相応な長い舌。

その舌を見ると何故か俺の胸がざわめく。

ざわざわと胸の中が粟立ち体中の血液がそこに集まっているかのよう——だ——。

「大丈夫かい？」

「あ？」

その言葉で急速に体全身に血液が行き渡っていく。恥ずかしながらどうやらコイツに声をかけられるまで意識がどこか遠い所に行っていたらしい。そんな俺を見てコイツは少し心配そうに目尻を下げて、

「平気かい？どこかに意識が飛んでいたみたいだけど……っと、まだ二カ月だもんね。私を見て昔がフラッシュバックするのも無理ない時期だね。だけど気にせず質問に答えるとするよ。大方キミは人肉かと思っただけだと思うけど残念。豚だよ豚。私は基本的に鶏が好きなんだけどね。あれって栄養あつて脂が少ないじゃんか。あ、どうでもいいことだったね。大体あそこに転がってるのはどの位経っているか知らないけどすっぱそうだから御免被るよ」

「……その話ぶりだと新鮮だったら食べるって風にも聞こえるんだけどな」

ただ揚げ足を取って皮肉ったつもりだった。だけど、

「ん。確かに食べるよ。まあ、血は鉄くさいし、臭いが残るから洗ってからだけど」

平然と肯定された。

「え？」

驚く俺を尻目に向こうは別に特別なことは何も言っていないかのようだった。

「ん？なんだその意外そうな顔は？キミは人を食べるのは間違っていると思うかい？」

少女はまるで小学校の先生が生徒に対して何かを訪ねるかのような口調でそう言った。

「凄い質問だな」

「早く答えなさい彬」

本当に飽きてきたのか机の上にべたりと頭を乗せていた。

「うるせえ。俺は間違ってると思う」

「へえ」

それを聞くと夕顔は興味深いとも言つような視線を俺に向けた。コイツの双方の瞳は他の物を惹きつけてやまなそうな綺麗な黒色をしていた。

「それはなぜ？」

その瞳がそう問いかける。

「なぜって、それを聞くのかいよ？」

「まあね。人様の意見を聞くのは大切なことだと思うし」

「……喋るから」

「ん？」

と俺の言葉の続きを顎で促した。

「人は喋ることが出来る。これは俺の知っている限り人間しか出来ない。尤もだから他の知的に劣っている生物をどうこうしていわけじゃないのは分かってるが――」

「なるほどね」

納得したかしていないか分からない表情で頷いていたが、多分後者の方だろう。

「おい。まだ――」

そこで話が途切れた。

十月十九日―？（後書き）

保存時期を見てみると書いていたのは中学二年の頃でした。
厨二病真っ盛りな気がします。
まあ今もですけど。

十月十九日―？（前書き）

随時更新していききたいと思います。

十月十九日―？

最初は気のせいだと思った。

だけど、ガタンガタンという音は耳を澄ませば気のせい程度ではないほど聞こえる。

どこからだろうか。

俺はこの部屋を見回す。

しかし、人がいる感じはしない。というか、もし誰かいるのなら普通に、コイツが入った時点というか、入る前に気づくだろう。

「おい。……えーっとお前の名前なんだ？」

そういえばとこんな時に気づくなんていささか間が抜けているというかただのバカなのだがコイツの名前を聞いていなかった。

向こうは俺のことを彬、彬って呼ぶからこつちも知ってるかと思っただが、どうも思い出せない。

こんな印象的な奴の名前なんて一度覚えたら忘れないだろう。

「夕顔」

少女改め夕顔はただその一言だけを発して、また最初と同じように口には笑みを張り付けていた。

「で、夕顔。今お前の後ろにある台所から聞こえた物音はなんだ？」

「物音？ 私には聞こえなかったけど？」

「え？ だって……」

確かに聞こえた。

気のせいではない。

そうなるここにいる可能性のある人間は誰だろうか？

少なくともAさん（仮）の家の人間ではないだろう。

もしそうだとしても犯人に殺されているし、生きていたら間違いなく通報して、俺達は警察に厄介になっているはずだ。

とすると誰だ。

「ちよつといいか？」

「どーぞ」

「お前はこの人がこんな状況なのと関係ある？」

「んーと。死体の場所を移した程度の関わりならば」

目の前の夕顔はころころと笑っている。

つまり、夕顔を信じるならば、こいつは殺していないということになる。

外はそろそろ暗くなってきたのだろうか。

十月は日が沈むのも早くなってくるからなあ……とそんなことを考えていた。

電気のついているリビングがやけに明るく見える。

「いや、そりやでもなあ……」

言っておきながらこういうのは変だと思うが、何故か容疑者が一人しかいない推理ドラマを見ているような感覚に陥った。

「一人で唸ってないでなんか喋ってよ。人様が悩んでる姿を見るのも一興だけど、今はそんな気分じゃないからさ」

夕顔は俺を責めるように唇を突き出した。

「……」

その発言に俺は苦笑した。

確かに人の不幸は蜜の味とは言うが、それにしても言い過ぎだろ。普通は思ってもそんなことは言わないぞ。

「いや、お前に聞いたとしてもしらばくれるだけだからな。今の物音はなにか考えてみただけ」

「ふむふむ。私が聞こえないと言った音のことね」

夕顔は聞く様子を見せてじつとこっちを見ていた。どうやら続きを話せということらしい。

「いや、ここにいる可能性のある人間ってのを考えたんだが、どうにも釈然としないんだなこりゃ」

「というと？」

夕顔が適当に相槌を打つ。

「だつてさ。家主の家族を死んでんだぜ？いるとしたら犯人位だけど、まさかそんなことはないだろ？」

なにが楽しくて自らが犯罪をした場所に居座り続けるのだろうか？理解できない。

いくら事件現場に犯人は戻ってくるとは言うものの、そのままそこに居座る人間なんているはずがない。

「やつぱり気のせいかなあ」

俺がこの状況にビビりすぎて聞こえただけかもしれないし。まあそうならそれが一番いいんだけどな。

——キミはつまらないね

「あ？なにが？」

前で聞いていた夕顔が、ため息を吐いて、さも不満げな顔をして言った。

「——つまらないよ。キミは随分とまあ、早計だね。自分の思っていること、知ってることだけが全てじゃないんだから」

夕顔は笑いを無理やり噛み殺したような顔で俺を見た。

「な、なんだよ」

「いやね。キミの意見が余りにも滑稽だったからねえ」

こちらを値踏みするような目をしていた。

「じゃあ、どういうことなんだよ？」

「簡単なことじゃんよ」

そう言いながら椅子から身を起こし台所を向かっていった。

それにつられて俺も動く。

「私が入った時鉢合わせになって、捕まえた」

別に大したことでもないという感じで、驚く俺を尻目に台所の中央の地面に面している扉に手をかけた。

その言葉を聞いて俺は、ワンピースから出ている夕顔の二つの白い腕を見た。

身長に比例するかのような細い腕だった。

「お前じゃ勝てねえだろ？そんな男なんかに」

これで犯人を捕まえたなんて到底信じられない。

犯人はもしかして子供なのか？

「……キミはどうやら私のようなか弱い少女にそんないきなり犯人と遭遇して太刀打ちできないという固定概念を持っているね」

「か弱いとまでは言っていないけどな」

「これが答えだよ」

俺の言葉を見無視して、えいっとという掛け声と共に引っ張っていった扉が開く。

この家ではここはそんなに使われていなかったらしく蝶番が嫌な音を立てた。

……中には、長年の間に溜まったであろう埃と共に体を電気コードで縛られている女がいた。

俺が中を覗いたのを見たのと同時に夕顔は俺の後ろで喋りだした。
「つまり、犯人は女だった。もちろん私はこんな人は知らないし、興味もなかったから私は素通りしたんだけど、向こうからこっちに来ちゃったからね」

正当防衛？と首を傾げる。

いや、多分過剰防衛だと思うぞ。

「つか、よく抑えられたな」

答えが分かった後だと負け惜しみっぽく聞こえるが、正直女かもしれないという予想はあった。

あったがそれでも俺は夕顔が勝てる道理はないと思う。

後ろにいる夕顔の方を振り返る。

まずこの体格差だ。

大人と子供の差は漫画の様に簡単に埋まるようなものではない。

しかもコイツの言葉を信じるならば、不意打ちに近い感じだったらしいからな。

改めて地下にいる女に目を移した。

薄暗いためか細かい部分までは分からないが、制服を着ているように見えるからそのような職についている人間だろう。

顔の作りは美人というわけでもないが、容姿で損するタイプの顔付きではないに見える。

俺達を見つけたせい目目がこちらを向いて黒目がギョロギョロと動き、なにかを喋ろうと口をモゴモゴと動かしていた。

しかし、猿轡のような物で口を塞がれているので、ただ息を荒く漏らすだけであとはなにも出来ていなかった。

「なあ。一ついいか？」

「一つと言わず何個でも」

パチンという音と共に、俺の視界が急に明るくなった。どうやら後ろで夕顔が地下室の電気を点けたようだった。

俺は振り向かず夕顔に聞いた。

「どうやって捕まえたんだ？お前とこの人との体格差を考えるといくらこの人が細くてもお前には荷が勝ちすぎてる気がすんだけど」
ただ電気を点けるために夕顔は後ろに行っただけのようで俺の横に夕顔が戻ってきた。

「別に大したことはしてないよ。私はただこの人を縛っただけ」
ところでさ、と夕顔は、俺を指差す。

「ねえ彬、人間の中で一番怖いことはなんだと思う？」

「一番怖いこと？また随分と漠然とした問いだな」

要領をよく得ない質問だ。

「そう？怖いって一口に言っても色々ありそうじゃない？死刑宣告された時とか、崖から落とされそうになったりとかさ」

それはまた随分と物騒な例だ。

全く参考になった気がしない。

「そうだなあ……じゃあ、うっかり殺人現場で犯人に出会ってしまったときかな」

そう聞くと夕顔は目を丸くして、

「随分とまあ、さっきの状況を皮肉ってるねえ」

と少し茶化した。

「流石はあの有名な倍率十倍越えの東専大学に現役で入ったキミだね。明らかに阿呆みたいなことを言ってるのに何故か頭が良い奴言う言葉に聞こえてしまう気がするよ」

すごいすごいとパチパチ拍手をした。

どうやら俺を馬鹿にしているようなのだが、そんなことより俺の頭には一つの疑問が浮かんでいた。

「そーいや、なんで俺のことをそんな知ってるんだ？」

「不気味？」

そう言つて少女は首を傾げる。

その問いかける姿はこんな風に人が死んでいて、その犯人が捕らえられているような場所にはおおそ不釣り合いだと思った。

「まあ、俺の知らない人が俺の個人情報呼ばれる奴を知つてたらな。けどお前の場合は最初から俺の名前呼んでたしそんな変な感じはしないけどさ」

我ながら臭い台詞を言つたな。

どうにも昔から臭い台詞を吐くクセが治らない。

その言葉を聞くと、夕顔は笑顔で頭を下げた。

何に対して頭を下げられたかは分からなかった。

「まあ……やっぱり不気味だね。知らない人に色々と知られているのはね」

話の筋を本線に戻すように少女は頬をポリポリと掻きながら言った。

「なるほど。そういうことか」

俺はなんとなく、向こうが言わんとしていることを理解した。

「人様の秘密を……その、したのか？」

その言葉を聞くとまた嬉しそうな顔をしてうんうんと頷いた。

どうやら俺の考えは間違っていなかったらしい。

こいつの言いたいことは多分こうということだろう。

人が最も恐れることは未知の事態であるということだ。

大体、会ったことも見たこともない奴にいきなり名前やその他もろもろを当てられたらさぞ驚くに決まってる。

いや、名前だけなら平気かもしれない。

けれど、それ以上のこととなると流石に自分はどこまで知られているのかという恐怖に苛まれるだろう。

恐らくそういうことをしたのだろう。

もっとも、それだけでこんな状況にすぐさまなるという説明にはならないがな。

部屋が明るくなり、目が慣れてきてからようやく気がついたが、俺の隣に夕顔がいるのを縛られている視認してからの彼女の充血していた目は見開かれ少しずつだが体を動かそうとしているように見える。

まるで、夕顔の視線から逃れようとしているようだった。

けれども上から見下ろしている俺達から彼女が逃れる術はない。

まるで、虫籠に入れられた虫のようだ。

逃げ回っても全ては手のひらの上だ。

「一体なんて言っ——」

「田中 芳江。年は三十二前後。身長は百五十六センチ。体重五十キロ。未婚。ここの人とは昔の同僚。保険会社勤務……まだあるけどね」

「……」

純粹に言葉を失った。

さつきコイツはこの人と初対面だと言った。

でもそれにしてもこの知識は可笑しいと思った。

けれどもコイツが適当に言っているとも思えない。

事実夕顔が一言言うたびに体をビクリと震わせている。

尤もこの人が有名人ならば話は別だがそんな人には見えなかった。もしかしたら俺が見たことないだけかもしれないけどさ。

ならば知り合いだった？どうして？という混乱が俺を包む。

今、俺を除いた二人の間に何が起きているのか意味が分からなか

った。

「私にはね。不思議な力があるんだ」

夕顔は急に神妙な面持ちで話を切りだした。

「不思議な力？」

いきなり話が奇妙な方向へ飛躍した。

「そう、分かっちゃうんだよ。私は宇宙と交信できるからね」

「はあ……」

なんかこの話が俺の理解の範疇を超えてきた。

そんな俺の心でも読んだのか夕顔は意地悪そうに唇を広げた。

「その顔は疑っているね。東専大学商学部二年生東雲彬。バイトは駅前から少し離れた所にある古本屋『伏見講』で働いている。その店主は適当そうに見えるが実は優しくて人が好いとか思ってるでしょ？」

つらつらと俺の個人情報暴露し始めた。

「……」

背筋に冷たい汗が流れる。

得意気な顔で語るのならともかく、さも当然なことの様に言われたら不気味というか不愉快極まりない。

「心配することはないよ。キミもこの『零尽教』に入って一緒に学ぼうじゃないか」

彼女は両手をまるで神への祈りを伝えるかの様に天を仰いだ。

「……」

少々呆氣にとられていた。

やっぱコイツの頭が可笑しいのか？新興宗教の勧誘だってもう少しは上手くやるぞ。

けれどその変な宗教が俺の情報を掴んでいるのは間違いなかった。

「とまあこんな感じ？」

「え？」

ふうと神妙な面持ちを止めて肩が凝ったのか数回肩を回して首を二三回振ると、すぐに俺の横に座った。

「少し、信じた？」

コイツに真実を言うのは負けた気がするから言いたくなかったが、
全てを覗きこむような視線に、

「……軽く信じた」

軽々と屈した。少しは頑張れよ。

その言葉を聞くとまた笑顔に戻った。

私は宗教なんてやってないよと笑う。

「新興宗教だからってインチキって決めつけるのは固定概念だよ。
ほら、どんな宗教だって最初は新興宗教だったんだしさ。要はそこ
にいる信者が救われればいいだけだからね。別に私はそんな専門家
でもないから言えないけど。ねえ彬、予言って出来ると思う？」

「あ？予言？まあ、よくテレビで見てる限り良くできてると思
うがな。尤も俺は信じちゃいないけどな」

胸の前で手を交差してバツと否定の意を示した。確かにキリスト
教も最初は新興宗教だ。

「その通りだよ彬。人間が未来のことを予測するなんて傲慢もい
いトコだよな。大体人様のことが人に分かるかって話だよな。だっ
てさ、『人は神様が作った最高傑作だ』って言葉があるけどその言
葉を作ったのが人間自身だしね」

夕顔の顔を漫然と眺めた。

明らかに年不相応な話を上機嫌に話している。

その顔からは端正な鼻立ちであることと、見た目通りの年じゃな
いこと位しか分らない。

「——でね。私がなんでこんな話をしたかと言うとね。『未来』
は視えない。さっき言ったよね。だけど『現在』と『過去』は見え
るよね？」

「え？」

しまった聞いてなかった。

いや、そんなに綺麗な笑顔を見せられて同意を求められたとして
も聞いていなかった俺には全然意味が分からない。

「意味がわからないって顔をしてるね」

俺の沈黙をそう受け取ったのか、疑問に答えるように夕顔が言う。
「簡単だよ。『未来』ってのは変えられる。だから曖昧な表現をする必要があるんだよね。よく耳にするでしょ。あなたは何年後かに何かなるかもしれないっていう表現。極論を言ってしまうえば明日貴方は死ぬでしょうって言われて、その場で自殺したらその予言は外れてことになるからね。はい。さて、ここで問題」

こいつは話の合間に俺を試すかのように質問を吹っかけてきている。

「今の話を踏まえると、『現在』と『過去』はどちらなるんでしょうか？」

はつきり言うと、さっきまで話を聞いてないから確信はないが、さっき未来は変えられるとかなんとか言っていた気がする。

「変えられない」

適当な答えだが、どうやらそれが向こうが求めている回答だったらしく、夕顔は、うんと頷いた。

「そだね。全く相手が適当な所で適当に相槌を打ってくれる会話ほど楽しいものはないよ。さて話を戻そう。『現在』と『過去』は視ることは出来る。ならどうすればいい？」

「あ」

なるほど、そういうことか。

「そう。つまり調べればいい」

言われてみればもの凄い単純な仕掛けだった。

この場合『過去』を知る必要がない。

こいつはその場の状況から情報を盗み取ったのだ。

最も向こうに通用する形で。

夕顔は俺の首を掴んで机の方へ引っ張った。

背は俺の方が高いので首が締まって少し苦しい。

「ゆ、夕顔さん？」

「いいから」

こつち来て。と夕顔が言った。

なんでも中のこの田中さんには聞かれたくないことがあるらしい。俺を机付近まで引つ張ると夕顔は耳元で小さくネタばらしを始めた。

「名前は胸につけてる名札と外から聞こえたし、年齢はこの死んでる人の誕生日がカレンダーに丁度よく書いてあって、肌の張り」と首の皺を見て大方の推測はついてたし、体重も同様に見た目からそれこそ着やせしてたりしたら分からなかったけどね。

と冗談っぽく言って笑う声が俺の頭に響く。

「それから、独身が既婚かってのはまあ殺し方が怨恨っぽかったからね。まあ、もし既婚だったら、そのまま独身時代の借りを返しに来たみたいな感じで動機っぽくしちゃっても良かったしね。あと最後の職業は割と簡単だったよ。だって机の上には片付けちゃったけど、保険会社のパンフレットがあつたし、この人の手帳もその会社の物。ついでにカレンダーもそうときている。だからいけるかなあって―」

「嘘だろ」

隣にいる夕顔に目を合わせる。

耳元で喋っていたせいか、夕顔の顔が間近にあった。

「え？」

十月十九日―？（前書き）

―から何かを作るとは難しいですね。

十月十九日――？

俺の発言に夕顔は、目をパチパチとしていた。

「そんなレベルで人殺してる人間を抑えられるか」

分からないが、そんな程度じゃ、一般人でも気味が悪いと思う程度で何も起きないだろう。

俺の言葉にしばらく目を丸くしていたが、

「ふーん」

なにやら面白そうなことを思いついたようにニヤニヤしながら座っている俺の体に抱きついてきた。

体は見た目通り余り発達しておらず抱きつかれた感触はなんというか硬かった。

「……なにしてんだ？」

別に子供に抱きつかれて喜ぶ性質じゃないんだが。

そんな俺の言葉なんてそっちのけで俺を抱く両手の力を強めた。

「んー？私の嬉しさをキミに対して表現してるだけさ」

実は僕はヨーロッパ生まれなのだよと、夕顔は囁く。

「全くその通りだよ。今の話だって相手がそう考えちゃったらペアだもんね。それに今の話はもしかしたら外してるかもしれない。

その通り。キミの言うとおりこれ位で済むなら警察もいらないうえよ」

――だっ たらさ

また俺の耳元でそつと呟いた。

――信じられるようにしちやえばいいんだよ。

夕顔は呟いた。

「……どうやって？」

それは確かにそうだ。

「そこは……ほら企業秘密？」

そう言つと俺を抱くのを止め先ほどの田中さんの所へ行つた。

「あらま」

夕顔が間の抜けた声を出した。

その声に釣られて台所の方を覗き見る。

「あつ」

反射的に声が漏れる。

地下室にいたはずの田中さんが台所に立つて夕顔と対峙していた。その目は血走り今にも夕顔に襲いかかつてきそうだった。

……つて、この状況つて俺も夕顔も危なくないのか？

そんな殺意むき出しの視線を受けているのにも関わらず夕顔は、

「ありやりや、随分とまあかかったね」

まるでこうなることを予測していたかのような喋りっぷりだった。

「ええ。流石にあんなに縄を切れそうな物ばかりこれみよがしに置いていったのだから予測出来てないわけないわよね。もしかしてあなたは私に殺してほしかったの？」

鋏とかカッターとか近くに置いとくものなのかしら。

そう言つて田中さんは笑った。

初めて聞いた田中さんの声は年よりもしゃがれていた気がした。

「まさか。あなたみたいな変人に付き合つてる暇はないわ。私のやりたいことは済んだし、これからのことも考えついた。だからあなたは勝手にこの茶番でも終わらせれば？」

そう言つて俺の方を振り向いた。

「そろそろここからお暇しようか」

俺の横まで歩いてきて俺の手を握った。

「お、おい。まだ向こうお前殺す気満々つてのがひしひしと伝わってくるんだが」

俺の手をリビングを出て玄関に行こうとする背中に声をかけた。というかなんでこいつは平気なんだ。

なにも関係のないはずの俺はこんなにビビっているっていうのに。

当事者であるはずの夕顔は平然の顔をして、平気だと答えた。

「平気って…」

あの田中さん憤怒の形相で睨んでいますよ。

さつき貴方が言った言葉のせいでめちゃくちゃ殺気だっていますし。

そんな俺の表情に夕顔は呆れたような顔をした。

「もう心配症だねキミは。それにしてもいい加減彼女も気づくはずだよ自分の体の異変に」

体って言うかなんと言うか……：：：～、夕顔は玄関へと歩を進めた。

「え？」

夕顔が言った事が信じられずに聞き返すと同時にきゃっと小さな悲鳴とともに大きな音が聞こえた。

「なんだ？」

音のする方向を見ると田中さんが転んでいた。

何もなかったはずなのに大きな尻もちをついていた。

「え？え？」

転んだ当人も驚いている。

もう一度立とうとしてもまた滑ったように地面に伏せてしまう。

なんだ？その場所だけ特別に滑るのか？

何かがおかしかった。

ただ、何かにつまずいたのではないことは傍目から見ても明らかだ。

「どうなってるんだ」

「ま。いずれ分かるかもしれないよ？」

いつの間にか、隣に戻ってきていた夕顔にそっと耳打ちしてみるとそんな答えが返ってきた。

いずれ分かる。

どういうことだろうか。

こうして話している間にも目の前の彼女はますます錯乱状態に陥

っていた。

ここからではよく聞こえないがぶつぶつと唇が動いている。それから何度も立ちあがろうとしても転ぶということを繰り返していた。

無様というより最早滑稽に近かった。

「……手が……足が……」

ぶつぶつと音を発する唇からそんな言葉がかろうじて聞き取れた。「手と足がどうしたんだ？」

隣にいる夕顔にそう尋ねると今度は唇を尖らせてこつちを振り向いた。

「どうなってるか考えればそんな質問は出てこないとは思っけど……ま。今は気分がいいからね。教えてあげる。彼女きつと手足が動かないんだろっね」

「手足が？」

なるほど確かにそれならば立てない。なんて簡単に納得出来るはずがない。

俺が顎に手を当てながらそんなことを考えていると夕顔が俺の手を離して彼女の前にすたすたと歩いていった。

「お、おい」

危ないぞと言おうとする前に夕顔がこつちを振り向いて大丈夫と言って笑った。お前が大丈夫と言っても、見てるこつちにはサーカスの綱渡りを下から見ているような気分だ。

あ、いやあれは成功するから少し違うな。

まあ、それくらいハラハラしている。

ついでに死なれたらもれなく俺も殺されるから勘弁してくれよと願った。

「ねえあなた？」

「ひい」

立てないために相対的に夕顔より目線が低くなった彼女は膝を使って必死の形相で地面を這って逃げている。

それでもそう大きくないこの部屋では逃げられる距離もたかがしれていた。

しかしこの状況になっても俺の頭では五体満足に見える彼女がどうして手足が動かない状況に置かれているのか分からない。

「なんでそうなってるか教えてあげようか？」

俺の質問に答えるかのように夕顔がおびえきっている彼女の耳元に小さく囁いた。

「あ、あ、あ、——、——」

ここからじゃ、なんて言っただか聞こえなかったが、彼女の精神を砕くには十分な言葉を言ったのは間違いなかったようだ。叫び声が途中から言葉ではなくただの音に変わり、顔からはサアーっと血の気が抜けていくのがここから見ていても十分すぎるくらい分かった。

「ひうつ」

彼女はそう奇声を発し、一度体を弓なりに硬直させた後ドサッと床に倒れた。

その様子を見届けると夕顔はこっちの方を向いて唇を歪ませた。

「一体どうしてこんなになっただろうね彬？」

若干楽しんでいるようにも取れる声で田中さんを見下ろしながら夕顔が呟く。

「疑問を挟む余地がないな。……お前が何かしたんだろ？」

うん。食べちゃった。

と別に隠しもせずに答えた。

さっき自分で言っていたから別に隠すことでもないと思うが、こつもあつさりと肯定されると少し拍子抜けという感じがした。

そう言つと夕顔は俺の手を取って、

「いこ」

そう言つて俺の手を引つ張った。

いきなり俺の範疇外のことが起こりすぎて、頭の処理能力が追い付かず、夕顔に引つ張られる形で家の外に出た。

入った時と打って変わって辺りはもう夜だった。

満月でもないが月が大きく感じられ、春のじめつとした風がまとわりついて不快だった。

「私ね。決めたよ」

外に出てから俺をようやく離すと月を背にして言った。

逆光のせいで夕顔の表情はうかがい知れない。

「なにをだ？」

「そうだね。キミについていこう。きっと面白いから」

「は？」

なに言いだしたんだコイツ？

最初に抱いた感想がそれだった。

はつきり言ってしまうと、もう今日みたいな事件は勘弁願いたい。あの場にあれ以上いたら俺の寿命が五年は縮んでいた。

ただでさえ、老い先短そうなのに、これ以上減ってしまったら洒落にならない。

俺の不満そうな顔を見ると少しだけ表情を歪めたようで少し雰囲気が変わった。

「やっぱりだめだよね……ごめんなさい。無理言っちゃって。分かってるそんなこと。でもね不謹慎かもしれないけど楽しかったんだ。キミといた時間は唯一私が私でいられた時間だったからね」

「お、おい」

話が凄い展開になってきてるんだが。

というかなんだこれは？どっかでカメラでも回っているのかと疑いたくなるような展開だった。

「けどそれももう終幕。泡沫の夢として諦めるわ。さよなら」

そう言つと、彼女は踵を返す。

「ちょ、ちょっと待った」

「え？」

夕顔は髪を翻してこちらを見た。

まるでそうなることを予想していたように期待したように目がさ
んさんと輝いていた。

「はあ……」

なんでこんなことになったんだろ。

自分の行動に軽く呆れて頭を掻いた。

「お前ってなかなか狡いな。そんな風にされたら断われねえだろ
うが。別についてきてもいいけど近々家は引き払うから、寢床程度
しか世話しねえぞ」

夕顔の雰囲気から暗いものがふつと消えた風を感じた。

「キミは優しいねえ。演技だって分かってるのにね。お礼にキス
してあげよっか？」

んーと俺に向かって背伸びをして唇を突き出して、手を腰に回そ
うとした。

「いらねえ」

夕顔の抱擁をさらりと躲した。

「むう。ま。いいや」

抱擁が避けられて一瞬不満気な顔になったがすぐに何かを思い出
したかのように、携帯貸してと手を出してきた。

「なんだいきなり」

そうは言いつつもとりあえず要求されたので貸してみた。

俺からそれを受け取るとどこかへ電話をかけ始めた。

そして数コールして電話が繋がるとそれを俺に返した。

「話しといて」

「あ？」

突き出された携帯を見ると番号の欄には110つまり警察に繋が
っていた。

あーはいはい。分かった分かった。

警察に簡単に状況を説明して電話を切って俺達は俺の家に向かっ
て歩きだした。

この日、俺こと、東雲彬は少女に魅入られた。

十月十九日―？（後書き）

一人でも見てくれている方がいらっしやれば感謝です。

9月某日（前書き）

話は少しずつ動き出します。

9月某日

――九月某日

父親の葬儀が終わり私は帰りの電車の中にいた。

母は何でも親戚と用事があるとかで私だけ先に帰らせたのだった。

「ほんと、大人って大変ね……」

呟き程度の声量にも関わらず閑散とした車内ではよく響いた。

座席から顔を出して車内を簡単に見回すと、爺さんが一人と上京するのが初めてだろうかという位に荷物を持っている私より少し位年上の男の人が一人いるだけだった。

「しかし堅苦しかったわねえ……こんな服もう着ないんじゃないかしらね」

自分の着ている礼服をつまんだ。

明らかに普段私が着てそうな服とは違い、高級そうな生地の小洒落た刺繍が入っている。

首に結んでいたリボンをほどく。

うん大分首が楽になった。

母がいたなら行儀が悪いとか言って注意されそうだけど、お生憎さま今は一人なのだ。

もともと一人になるのは苦手じゃない。

むしろ好きな方だ。父は、仕事にかかりつきりで家族なのにもかかわらず、いや家族だからこそ半年以上会話という会話が無かった。私は会社の名前は知らないけれど、父は名家の出らしくて、会社での地位も重役と呼べる地位にいたことは何回か偉そうな人が訪ねてきたのでそう思っていた。

死んでから知ったのだが実は、偉いとかそんなものではなく、その会社の社長だったんだけどね。

つまり私は社長令嬢だったのだ。

今となつては肩書きの初めに元がつく立場になってしまったのだ

が。

それに対して母は家柄が平凡だった。

だから、周り親族に気を使わなければならなかったのだろう。

その点については同情をせざるを得ない。

世間体を気にしすぎたのだ。

まさに上は洪水、下は大火事。さてなんだ？ 答えは我が家。みた
いだったわね。

そして、私は一人になりましたとき。

めでたし、めでたし。あれ、違ったかしら？

「ん？」

どうやら少し寝ていたらしい。まだ意識がはっきりとしていない
が、おぼろげに車内には終点を知らせるベルが鳴っている音が聞こ
える。

その音がどうしようもなくうるさいので、しょうがなくなきゆっ
くりとした足取りで駅へと降りた。

「『人生は何事もなさぬにはあまりにも長いけど、何かをするに
はあまりにも短い』とはよく言ったものね」

車内とは違い構内には人がたくさんいたので私の独り言を訝しむ
ような眼で見てきた人もいたが気に留める必要もないだろう。

「さてと、なにかを始めようかしら」

座っていて体が疲れたのか伸びをすると肩甲骨と首がポキッと小
気味のよい音を立てた。

「とりあえず……大学にでも行こうかしら。話はそれから決めれ
ばいいわね」

朝ごはんは何にしようかなあとか考えながら大学へと足を進めた。

9月某日（後書き）

短くてすみません。

十月二十日

——十月二十日明朝

「お願いします!!」

朝一番の行動は地面に頭をこすりつけることだった。最初に断っておくがこんなことは日課ではない。その姿を見て俺の頭の先にいた人物は呆氣にとられているようだった。まあ、俺の目の前には地面しか映ってないので想像でしかないけど。

「待て待て。話が全く見えない。全部説明しろとは言わないが、最低限はしろ。そして近所迷惑だから土下座はやめろ」

伏見講の主人川淵新は苦笑いでそう言っているようだった。

「全くなにをやってるんだろうね」

俺の後ろについてきた夕顔が面白そうに言っていた。

その言葉を聞いて俺は、軽く唇を鳴らす。

お前の為にこっちは頭下げてんだよ全く。

そう心の中で毒づいた。

——あれから俺達は、あの家から逃げ出して警察に連絡し、一度は自分の家に帰った。

実の所もう自分の物でもない。

自分の分の合鍵は不動産業者に渡してしまったが、父親と母親の鍵は持っていた。

鍵穴を変えられてしまっていては無理だったが、幸いなことにまだ入居者がいなかったの、今日位は見逃してくれるだろうと思った。

結果だけ言うと失敗だった。

いや、別に家に戻ったこと自体は間違いではなかった。

なかったのだが……そうだな、日付が変わるか変わらない位の頃に家のドアがノックされた。

いつもの感覚でドアを開けると、愛想のよさそうな警官が警察手帳を見せて、ちよつといいかな。とかドラマの中の刑事が言うような台詞を平然とした口調で言ってきた。

話を聞いているとどうやら俺達をあの家から出ていくのを見た人がいるらしい。

そしてその人はご丁寧に俺達がこの家に入る所まで見ていたらしい。

全くそこまで離れてないにしろ距離はあるのに随分と凄い野次馬根性だ。

と、その通報者に呆れた。

一応何か知っているだろう。そういうことで警官が来たらしい。ちなみにあの家は、あのなんとかさんの家のことだ。

全くなんでこんな時に限って見ている人がいるんだよ。

どうやら警察に通報するのが早かったみたいだ。

夕顔ももう少し考えるよ。しかし今更自分が電話しましたよなんて申し出たら、余計面倒なことになりそうなので言わなかった。

八方塞がり。まさにツイテないの一言に尽きるのである。

いや、本当の悲劇はここからだったのだ。

この警官は俺達が電話したことには当然気づくわけもなく、そろそろ時間も時間だからと一言言って、扉を閉めようと背を向けた瞬間だった。

「どうしたの？誰？」

ペタペタと音をたてながら夕顔が玄関に歩いてきた。

この時ほど焦ったことは今まで生きてきた人生の中でそんなにないだろう。

ヤバイ。完全にアイツの存在を失念していた。

俺の後ろからの新たな声に気づいた警官は、まだ人がいるのかと振り向いた。

あ。終わった。

警察が聞いてきた事件とは別の事件で捕まりそうな気がする。

今なら絶対この警官が聞いてくれることが分かった。

予言すらできる。

「この子―」

「妹です」

向こうの質問を言い終わる前に言い切った。

俺の態度にムツとしたのかやや唇を尖らせて、

「え、でも、表札には―」

そう言って警官は玄関の表札を見つめる。

「書いてありますよね？」

表札には確か妹の名前があつたはずだ。

「ああ、でもなんか消したようなような跡がある気がするが……」

「じ、実は、生き別れの妹なんです。それが今晚あそこらへんを歩いてたら再会しました。涙の再会です。邪魔しないで下さい」

「ちよつと待って下さい」

一瞬だけ警官の目が光つたように見えた。

「え？」

「今、あの事件現場周辺で会つたつて言いましたね。ならば何か知っているかもしれませんね」

「そんなことないでしょうよ」

努めて素面で答えたつもりだった。

内心は自分の失態に頭を抱えながら悶えてる自分がいる。

「そんなことないかあるかは私が決めますよ」

警官は侵入を防ごうとしている俺を押しつけて今にも夕顔に食ってかかりそうな時、なんと夕顔からこちらに近づいてきた。

目で夕顔にこっちに来るなと合図したが、どこ吹く風とでも言うようについには俺達の目の前に来た

「お嬢ちゃん丁度よか―」

「私が見たのは、おばさんがなんかあつたお家に入って行ったことだけ」

「ほ、本当かい」

警官の問いに夕顔は軽く首を縦に振った。

「ごめんなさい。私疲れたの。おまわりさん頑張ってください。おやすみなさい。おまわりさんとお兄ちゃん」

くすりと笑うとすたすたとこの場から退場した。

ナイスよくやった夕顔。

心の中で夕顔にガッツポーズを送った。

「……あとなにか？」

「……分かりました。ありがとうございました。では」

そう言うとは何故か俺の腕を掴んだ。

「なんですか？」

「一応あなたは目撃者なので詳しく聞かせてもらいます。あんな子に聞くのは可哀想ですからね」

「自分も眠いんですけど……」

「気のせいだよ。頑張れ」

そのあと捜査本部のようなところへ連れて行かれ、明け方まで解放されなかったのだ。

「——というわけなんですよ」

「ふうん」

新さんはなんだか釈然としなさそうな顔で頷いた。

「で、今キミの上に乗ってるその子は誰なの？まさか本当の妹なわけがあるまい。確かお前の所には本当に妹がいただろ？」

「……夕顔の奴上に乗ってたのか。」

道理でさつきから俺と地面の密着度が増してると思った。

「そうですね。確かに俺には血の繋がった俺より年下の女の子がいますよ」

「それを妹と言うのだ馬鹿者」

新さん。今は頼むからアイツのことは思い出させないで。

この状況下だと心臓と脳に負荷かかりすぎで潰れちゃうから。

「一体、今日はどうした？いつもよりひねくれているな」

「多分私がいるからだよ」

突然俺の上にいた夕顔が喋った。
いい加減邪魔だ。

降りて欲しいと全力で思う。

そんな俺の意思が通じたのかちゃんと降りてくれた。

「なんかあんたがしたの？えーっと付き人A」

「付き人Aじゃなくて夕顔だよ。それに彬の方が付き人っぽいよ」
そう夕顔が冗談めいて言うのと、「確かにな」と苦笑いをしていた。

「あ？夕顔お？あ、名前か。それにしても夕顔か……お前年いくつだよ？」

「千と飛んで十八歳」

そう言うのと新さんと夕顔は顔を見合わせて笑った。

そこに入れる余地はない。俺には二人が何で笑っているかが分からなかった。

「ん？なんだ彬分らないのか。ま、分からなくても死なないから気にするな」

そう言うって俺の肩を叩いた後で新さんは、後は任せた。と夕顔に言った。

はい。と行儀良く夕顔は返事をした。というかさっきのやり取りだけでもうそんなに仲良くなったのかよ。

こっちは昨日からいるのに未だに遊ばれてるっていうのにさ。

「彬。いい上司だね。非常に好感度が高いよ」

ぐいぐいと夕顔は新さんに顔をこすりつけていた。

新さんも満更ではないようで、なすがままにされている。

「おいおいどうした夕顔？なんか彬にされたか？」

「人聞きの悪いことを言わんで下さい」

というかそんなことしたら食われる。

いや性的な意味じゃなくて、本当に頭からムシヤムシヤと。

「あ。そっぴや彬。なんの用なんだ？こんな朝に」

「え？言ってますでしたっけ？」

「聞いてないな。お前は私が扉を開けると、開口すると同時に土

下座をするという変態紛いのことをしていただけた」

「彬、もう一回警察に行ってくる？」

「誰が行くか。というか夕顔。頼むから静かにしてくれ。ここ以外に事情を話さずに住めるとこなんてないんだからな」

「ちよつと待て」

その声に反応すると、声の主である新さんが訝しむかのような顔で俺の顔を覗きこんでいた。

こうして近くで見ると新さんは髪は長くて黒いし目は切れ長で、相当器量が良い。

年だってそう離れていない人にこう言うのも失礼かもしれないが、俺より大分大人であるように感じた。

「な、なんすか」

やや目線を逸らしながら聞いた。

「つまり今の話から推察するとあれか？私の家に泊めてくれってことか？」

「いえ、ぶつちやけた話伏見講の店内でも良いので泊めて下さい」「なんか卑屈だね彬」

と言うと夕顔はようやく俺の上から下りた。

「……なんか可哀想な奴だなお前つて。というか、私の家はここだぞ」

呆れ半分という感じで俺を見ていた。

「ほつといて下さい……ってマジですか？」

そんな話は初耳だ。けれど、なるほど言われてみれば納得出来なくもない。

ここは人が住めるスペースなら簡単に確保できるだろう。

大体、家じゃなければこんな時間から伏見講にいるはずがない。

「で、無理っすか？」

「スペース的には無理じゃないけど、やだ」

竹を割るかのように随分すっぱりとあっさり断られた。

「……ちなみに差支えなければ理由を」

「私的な時間に人がいると気が休まらないから」

「俺がいる時でも、私情で店とか閉めてるのに？」

その言葉を聞くと新さんはムツと顔をしかめた。

「うるさい。それはあれだろ、大吾のバカが相談しに来た時だろ？いいから私だって一人になりたい時があるんだからな」

「……」

そういう理由ならしょうがない。諦めて部屋を探そう。

そう思っで一礼して帰ろうとした時、

「ねえ、私はだめ？」

夕顔が伏し目がちに不安げな声で新さんに聞いた。

新さんはその言葉を聞いた瞬間に困ったような顔になった。

「そうか、お前がいるのか……。彬の奴はそこら辺で寝てても死ななそうだし別に良いけどなあ。お前みたいな体だと色々不便がありそうだしな。うーん……」

そういうと腕を組んで考え始めた。

もしかしてこれって勝算アリ？とか俺は考えていた。

「そうだなうん。夕顔いいよ。お前は家に泊まっても」

「マジっすか？」

まさかの展開に俺はリアクションが思いつかなかった。

「いや、彬。お前はそこらへんで寝てろ」

俺に対して新さんの冷静なツツコミが入った。

おかげで少し落ち着いた。

「なんだか、親権を取られた夫みたいな気分です」

「慰謝料ふんだくるぞ」

俺が父親で新さんが母親、そして夕顔が娘。

離婚の原因は多分俺の浮気だろう。

絶対裏切りとか許さなそうだもんな新さん。まあ絶対ありえないけどね。

「ね。新」

「ん？なんだ？」

新さんと夕顔はいつの間にか名前呼び合う仲にまで発展していた。

しかし、どうでもいいのだが、新さんは見かけによらず子供が好きなのか。

さつきから表情が妙に優しく見えた。

「彬も一緒じゃだめ？」

「うーん。夕顔としてはコイツは必要か？」

新さんの問いかけに夕顔は首を傾げた。

「いやあ、別に必要じゃないんだけどさ」

「つて、おい」

ちよつと待てコラいらねえってなんだよ？そこは嘘でもいるって言うてほしい。

「新もさ、本当は泊めてもいいって思ってるんでしょ？でも素直に泊めてやるのは癪だとか考えてるんでしょ？」

「何言ってるんだお前？」

お前、新さんの性格読み違えてないか？

この人は確かに優しい人だけど、明確に線引きをして人付き合いしてる人だぞ。

関わりすぎず、見逃さずって言うのが信条の人だぞ？

そんな俺の考えてることが分かったのか、夕顔は俺に微笑むと大丈夫と口で言っていた。

「ね。新」

新さんが夕顔の言葉に若干たじろいだように見えた。

「ん？うーん。まあ、夕顔が言うなら……よし彬」

「な、なんすか？」

「お前給料半分に減額な」

「なつ、なんすかそれ？」

新さん、いくらなんでも横暴だろそりゃ。

「うるせえ。家で暮らすならそれ位我慢しろ」

こつんと頭を小突かれた。

「いいんすか？」

聞き返すと、新さんはその言葉を無視して店内に入ってしまった。というかそんな風に扱われると信じられないんですけど。

性質の悪いドッキリかもしれないと俺は邪推した。

あんなに嫌だと言っていた新さんが簡単に折れてしまうことがあるのか？

そんな疑問をよそに俺の胸で携帯のバイブレーションが鳴った。誰からだろうかと確認してみると、新さんからだった。なんだろうかと中身を確認してみる。

『今日仕事来る時に荷物と酒持ってこい。後夕顔に感謝しろ。…いきなり来たから言い忘れてたが、退院おめでとう』

「新さん…」

本気で涙が出そうだった。涙が出そうだったので少し鼻をすする。荷物は全部今持っているし、酒は頑張って買おう。

「ねえ、なんて書いてあったの？」

俺の携帯を見ようとした夕顔に画面を見せると、嬉しそうな顔で良かったねと言っていた。

「サンキユな。夕顔」

「まあ、あのまま死なれても目覚めが悪いからね」

夕顔は、なんでもないように答えた。

いや実際俺からしてみれば新さんにああまで言わせたのは素直に凄いと思う。

「ん？そついやさ、一つ聞いてもいいか？」

「なに？どうして新が彬を泊めてもいいって思ってたかについて以外なら答えてあげるよ？」

思わず目を点にした。

当の本人は俺の反応は楽しんでいるように見える。

「……俺の言いたいことがどうして分かったんだ？」

昨日からこうも当てられるとはつきり言って不気味だ。今回は事前に調べることもなんか出来なかったはずだが。

それとも俺はそんなに考えてることが読みやすいのだろうか。
少し不安になる。

「あらま。当たった？別に、大したことじゃないから教えないよ。大体そんなことも分からないなら、私が頭から食べてあげようか？」
中々不穏な台詞を呟くと自分の歯をギリリと見せて恨みがましい視線を俺に向けてきた。

なぜだか知らないが夕顔はえらくご立腹のようだ。

あとお前がそんなこと言うと洒落にならないから止めて欲しい。

「怒ってる？」

「怒ってない」

ぷい。夕顔はそっぽを向いた。

俺と夕顔の間に微妙な空気が流れる。

この微妙に険悪な雰囲気絶つたのは新さんのメールだった。

助け舟に縋るかのように画面を見た。

『お前ら、店先で騒ぐのは勝手だが、時にお前大学はどうした？
そろそろ時間が押してるんじゃないか？』

そう言われて携帯の時計を見ると午前八時二十分を指している。

「げ」

今日は九時頃から取っていた授業があつたはずだ。

今から向かえばギリギリ平気な時間である。

ただでさえなんか色々あつて出席が危ないのにこれ以上休むのは俺の為に良くない。

伏見講から見える最寄り駅を見た。

まだ最悪の展開にはなっていない。

だが、ここで逃したら本当にヤバイ。よし、手早く新さんに『夕顔をお願いします』とメールを打った。

「じゃあな」

「あ」

後ろで夕顔が何か言っていた気がしたが無視して俺は駅へ走った。

十月二十日：？（前書き）

こんにちは。

一人でも見て下さる方がいて嬉しい限りです。

十月二十日・？

――十月二十日午前八時二十五分

「はあ……」

なんとか間にあった。車内でふうと一息ついた。

丁度ホームに滑り込んできた電車に乗ることが出来た。

おかげで遅刻は免れそうだ。

落ち着いてきたので、新さんからの返事が来てないか確認するために携帯を開く。

案の定返信が来ていた。

なぜだか知らないが添付ファイルも送付されてきていた。

『いたいけな女の子を置いていくなんて男の風上にも置けない野郎だな。お前の代わりに夕顔雇うぞ』

そんな不吉な文面と共に添付されてきた画像には夕顔が画面いっぱい、あつかんべえとしていた。

「…なんか和むな」

自然とそんな言葉が出ていた。

まだそんなに大人びてないのに顔が整っているせいか、夕顔がそんな顔をしてものにもイライラとしなかった。

むしろ微笑ましく感じる。

とりあえず後で謝っておいた方がいいなとか考えていると大学の最寄り駅への到着を知らせるアナウンスが聞こえた。

携帯で時間を確認するとまだ少し時間に余裕があった。

とは言っても油断は禁物なので、俺は電車から降りるとまっすぐ大学へと向かう。

「つーかいつ来ても大きいよなココ」

実際最後に来てからそんなに間は開いて無いのだが、ここに匹敵する敷地を有する建物を見てこなかったものでさらに大きく見えた。

東専大学は自分で言うのは憚れるが、言ってしまうえば超難関と言

われる大学である。

どんなに不況であつても合格倍率は十倍を下回らないし、ここを卒業した人達で著名人も少なくない。

最近テレビで活躍している人を校舎で見たことだつてある。

そして受験生が多いため施設や設備ははつきり凄い。

文系だから専門的な言葉は知らないが、なんか舌を噛みそうな名前の薬品が入ってきてなんでもそれはすごいことらしいと理系の友人は鼻息を荒くして言っていた記憶がある。

この学校に入ってくるのは、いわば選ばれた人間達なのだが、何故かそんなに勉強していたように見えない連中が多いのが特徴だ。

身近な例をあげると俺の友人である頼田修一はただの変人だ。

あいつが裏口で入ったという話を聞いたら間違いなく信用するといふ位にふらふらしている。

「おい」

後ろから声が聞こえた。

その声に振り向くと後ろから修一が走ってきた。

久々に会つのに服装すら前と同じようなシャツとジーパンとは、変わり映えしない奴だ。

「おお、噂をすればなんとやらというのは本当らしいな」

「ん？なに言つてんだ？それよりさ、また人体の不思議展行かないか？」

ポケットから嬉しそうにチケットを二枚取り出して一枚俺に押しつけてきた。

走ってきたせいか少しチケットが湿っていて気持ち悪い。

「誰が行くか」

この間せがまれて行つたが、どうにももう一度行く気にはなれなかった。

「えーなんでだよ。せつかく合法的に死体が見れるのに」

「将来死体保存室で働け」

修一は考えとくと真面目に返事をした。

お前ならきつと嬉々として死体を見てそして不謹慎だと怒られるだろう。

というか昨日死体を見たからもうあんなもん当分はたくさんだった。

俺の態度から無理と判断したのか、すぐごとチケットを俺からふんだくった。

「しょうがないなあ。土岐堂でも誘うかなあ」

「俺はそんなもんには行かねえぞ。頼田」

また後ろから人が来ていた。

土岐堂は今日も黒い甚平を着て、下は草履だった。

甚米で学校に来说ていると言うと、部屋着で学校に来说るようにも聞こえるが、本人曰くそんなことはなく外出用の服らしい。

いくらこの大学でもその風貌は浮いている。加えてこいつの背は俺より高く体格もいいのでどつかのヤクザと言っても分らない。

「ちよつと待ってよ、義くん。いきなり早歩きしだしてさ」

そう言つて彼女は土岐堂の肩に手を置いてはあと一息ついた。

そんな彼女に対して土岐堂はスマンと素直に謝つていた。

「こいつらがいたからな」

「え？こいつらつて、あ、ああ！！彬くん久しぶり！！元気にしてた？じゃないや、もう平気なの？」

俺を見つけると土岐堂の前に出てきて晴れやかな笑顔であいさつをした。

「久しぶりだな橘」

うんと橘は頷いた。

橘佳澄は見た目は美人だ。良く言えば活発、悪く言えば何も考えていないので、明らかに時代の逆最先端に行く土岐堂には合っていないと思う。

そんな彼女の今日の服装はピッタリとしたジーンパンによくわからない絵がプリントされたシャツを着ている。

今の流行が何であるかは知らないが、少なくとも土岐堂とは似合

っていない。

しかし、人生とは分からないもので、告白したのは橘の方だったらしい。

話を聞くと彼女は土岐堂と一緒にの大学へ行くためにわざわざ浪人までしてここに入ってきたらしい。

「あの、俺もいるんだけど……」

「あ、どうも頼田修一さんおはようございます」

社交辞令のように機械的に橘は言った。こいつらは俺が知る限り知りあつてからずっとこうなのだ。

なんでも修一の顔が昔ム力ついた先生に似ているらしかった。

本人になんの落ち度もないのに災難だとは思うがこればかりはしょうがない。

「お前ら、そろそろ時間になるぞ。じゃあな佳澄」

そう言つて土岐堂は俺達を両脇に抱えて橘に挨拶をすると「じゃあね」と手を振つて返事をしていた。

「お前もあんな彼女がいてうらやましいな」

「うるさい。あげねえぞ？」

土岐堂は仏頂面を崩さずそんな軽口を叩いた。

いらねえよ。と俺は、答えて足早に教室へ行つた。

「……なあ」

「なんだ修一？」

後少しで昼前の授業が終わるという時に修一が飽きてきたのか俺に話かけてきた。

「なあお前、今日昼飯買ったか？」

「あ、そついや買つてないな」

あの時急いでたからそんなことにまで気が回らなかった。

その言葉を聞くと修一は不気味な笑いを浮かべた。

「丁度いい。これ見たら飯いらすだぜ」

満面の笑みで携帯の画面を俺に見せた。

「んだよ？またそういう系の話かよ」

こいつは依然からやたらと俺にグロい画像を見せたがる。

しかもどこからか持ってきたのかも分からないような奴でそれをいつも昼飯時に見せたがるという徹底的な変態振りを発揮している。

「なんだこりゃ？」

携帯の画面を見るとどこか暗い路地裏が映っていた。

どこだろうか？見たことある気がするんだが。

あ、画面の先に何か見えた。そこに向かって徐々に画面が近づく。だんだんと輪郭が明らかになってきた。

「なんだこりゃ？」

壁に顔と手が生えてる。

腕はだらしなく垂れ下がり、顔は当たり前だが真っ白だった。当然ながら死んでいる。

まさに壁男ならぬ壁女か。

映像は目を凝らしてようやく女と視認出来る位置まで来るとそこから先には動かなくなった。

「どうしたんだ？」

これで終わりか。いつもの修一の動画に比べてそこまで凄いものではない。

そう聞くと横で俺の反応をうかがっていた修一がつまらなそうな顔をして、

「んなもん見つかったヤバいからだろ。全くとっとういりアクションを期待してたんだけどなあ……」

「これいつのだ？」

「あ、これ？知らないか最近起きた奴なんだけど」

「そもそも俺が戻ってきたのは最近だぞ。病院でやれ誰が死んだなどのニュースが俺のいた所で流れるか。というかあそこにはテレビが無かった。でいつなんだ？」

「なんだ。興味湧いた？」

「まあ気にはなる程度には」

その言葉を聞くと気を取り直したように、フヒヒ、と不気味に笑いだして、実は三日前のことなんだと言った。

俺はその言葉を聞いてもう一度画面を見た。

画面はこの壁女が映っているシーンのままで止まっている。

気味が悪いので画面を閉じた。

「そついや、この人の下半身は？」

どう見ても胸から上しか見えない。もしかしたら本当に壁の中に埋まってるのか？

「えーっと確か、ちよつと行つた所に骨盤から下が地面に垂直に立ってたらしい。まったくどこの犬神家かって話だよな」

確かにその姿を想像してみると、被害者さんには悪いけど滑稽にしか見えなかった。

だつて考えてみるよ。地面から足が立ってんだぜ。

そのあと修一が自慢げに語っていた概要をかいつまんで説明するところなる。

場所はニユースでは都心としか漠然と説明されてなかったが、実はこの近くであるという説がネットでは流れているらしいこと。下半身が見つかったが体をくつつけてみると長さが足りないらしい。

だから、犯人は三個に切り分けて処理したらしいということだった。

「さすがは、行動力のある変態だな」

「俺達の業界ではほめ言葉です」

こいつがなにを言っているのか分からなかったが、大方見当もつかない世界のことみたいだから変に首を突っ込んでコイツを調子づかせるって面倒だから苦笑いをして流した。

俺達の会話が途切れてすぐ午後の講義が始まる鐘が鳴った。

あとこの講義ともう一つ実習を受ければ今日は帰れるのでしぶしぶ準備を始めた。

そついや、昼飯食ってないな。

修一の言葉を受け入れるのは癪だが、本当にあの映像を見て飯を食べる元気はなくなっていた。

俺は講義が終わると同時に教室を出る。

いつもなら修一や土岐堂達と帰るのだが、今日は急がなければいけなかった。

「新さん大丈夫かな？」

今朝大学があるからと言って不機嫌な夕顔を新さんに一方的に押しつけてしまったのだ。

何かお礼をしなければ。

これ以上機嫌を損ねないためにも酒は買っておかなければならないし、そうなるとつまみも必要とだろう。

とりあえず、俺は駅で降りると伏見講の反対の大通りの方に出て、スーパーに立ち寄ることにした。

大通りにあるスーパーはいわばチェーン店で、毎日四時頃にタイムサービスをやっていた気がする。

今は５時半だ。だからなのか分からないが、ある一角が台風が去ったように荒れていたのが見えた。普段こんな時間に来ないので初めて見たが疲れ切って裏に帰って行く従業員が痛々しかった。俺の探し物は幸いにもその台風の影響を受けずに買えた。

なので急いで伏見講に行こうとすると、スーパーの入り口で見知った顔を見つけた。

「おい、橘」

「え？」

突然話しかけられて驚いたのか、肩をビクツと震わせてこちらを見た。

「あ、彬くん。何しに来たの買いもの？」

そう言っただけは俺の荷物の中身を確認すると俺を見て、

「今何歳だっけ？」

「今年で二十歳。だから酒は合法だ。もっとも足りなくても買っ

てたけどな」

俺が肩を竦めるとカゴの中のビン同士が当たってカランと音を立てた。

そっかあ、私たちもう二十歳なんだよねえ……。と伸びをして橘は、感慨深そうに言った。

伸びをした時に髪の毛が鼻にかかってじれったそうだった。

俺の視線に気づいたのか、なにか意味ありげの表情で微笑んだ。

「そういや、宴会って今日の何時から？」

「いや、分からない」

ん？ちよつと待った。

今とても自然な流れで聞かれたから素直に答えてしまったが、そもそも俺はそのこと喋った記憶が無い。

橘の方を見ると企みが成功して嬉しそうに笑っていた。

「いやいや。ただ、カマかけただけだよ。じゃ私は荷物置いて義くんを誘って行くね」

「ちよつと待て。まだ何も言っていないぞ。そもそもなんでお前たちに来るんだ？」

新さんの所には夕顔がいるのだ。

下手に見つかりと土岐堂辺りが真顔で攫ったのかと聞いてくるに違いない。

「いいじゃん。堅いことはなしで。まあ、お得意様ってことで大目に見てよ」

お願い。と両手を合わせて小首を傾げるようなポーズをした。

橘は、文学部に入ったためか、古本屋でもある伏見講に立ち寄ってちゃんと本を買ってくれる良心的なお得意様なのである。

ここで断るのも変な気もするけど、このまま行くとそのまま夕顔について質問攻めに遭う気がする。

俺のそんな悩みを砕いたのは一つの声だった。

「あ。彬がいる」

ん？今最も聞きたくない聞き慣れた声が聞こえた気がした。

「ん？彬くん。返事しないの？女の子が話しかけてるよ？」

俺の様子が変だと思ったのか、俺に耳打ちをしてきた。

「いや、気のせいだ。きっと小学生の友達に偶然俺と一緒にの名前がいただけだろ」

「彬あ。東雲彬あ。無視するっていうなら、なんか暴露するよ？新からいっぱい仕入れてきたから」

「なんだ？」

しょうがない。

このまま喋らせておくとこのスーパーの入り口で俺の身の上話をされたらたまったもんじゃないので反応することにした。

というか、夕顔の容姿から、暴露という言葉は似合わなさすぎる。

「え？この子なに？可愛いね」

まるで小動物を触るかのような手つきで橘は夕顔に触れた。

触られると夕顔はむずかゆそうに頭を揺らした。

「夕顔。人様に無暗矢鱈に絡むな。周りの人に迷惑だろ。って、なんだ。佳澄と彬か」

夕顔の後ろにいたのは朝会った時とは違いちゃんと外に出るような格好をした新さんが俺達を見つけて目を丸くした。

「時に佳澄。例によって義成の奴とは一緒じゃないのか？それとももうこいつに乗り換えたか？」

「その冗談は笑えませんよ。私の義くんに対する思いは世界一ですから」

そのことを誇るように胸を張った。

そう言うことは、分かっていたらしく、新さんは、まあそうだなと素っ気なく答えていた。

話を聞くと、自分で今日酒を飲むと言った手前、さすがに自分のつまみ位は揃えておこうということで近くのこのスーパーに来ていたらしい。

「まあ、そう言ったのは夕顔なんだがな」

話し終わってから、夕顔を軽く小突いた。

「だってさ。彬が駅からこっちに向かわず反対方向に行ったから、気になって新に聞いてみたら、大方ここだろうって言ってたからね」
夕顔の方はもう目的を達したかのように新の手を引っ張ってスーパーから出て行った。

「なんだったんだ一体」

「さあ？ところで彬くん。一つ聞くんけどあの子誰？親戚？」

妹はあんな子じゃなかったから……でも似てないし。

「というか誰が好き好んで彬くんみたいな人のところに預けるかなあ……とぶつぶつと独り言を言っていた。」

「橘。全部言ってるぞ」

頭を軽くはたくと現実に戻ってきたようで、あはは、申し訳ないと謝られた。

なし崩しのだが、結局伏見講に夜に土岐堂を連れ立ってくるらしく俺たちはそこで別れた。

今度は寄り道もせずにならぬとさつき通った道を引き返すように歩き始めた。

途中にあるお世辞にも繁盛していなさそうな電気店のテレビが映すニュースがふと目に留まる。

「これが修一の見せたやつか」

テレビでは、俺の昼の食欲を奪ったあの壁女の事件らしきものの特集が組まれていた。

まず最初に簡単な事件の概要が説明され、それから遺体の状況が説明されていた。

当然お茶の間にあんな映像を流すわけにはいかないので、実際の映像などはもちろん映るはずはなく、簡単な図で示されていた。

あの動画は暗くてよく見えなかったので細かいところは見えなかったのだが、説明された状況は修一のそれと符号していた。

話がある程度進むと、元捜査一課の某さんが今回の犯人はどうであるとか、動機はこうではないかと自慢げに語っていた。

あほらし。

そう思ったのでテレビから離れ、帰り道をまた歩き始めた。

動機なんて後付けに決まっている。その時までいくらその人が憎かるうが、その瞬間にはこいつが憎いからなんて考えて殺してる人間なんているはずがない。

動機なんてものは第三者に分かりやすく事件の概要を知らせるいわば記号みたいなものだと思う。

「こんなことを考えるなんて珍しいな。夕顔の喋りがうつったか？」
そんなことを考えているとまもなく伏見講の前に着いた。

「いらっしやい。って彬か。なんだ挨拶して損した」
なんと店番を夕顔がしていた。

しかも服装がさつきスーパーや最初に会った時のワンピースと違い、黒いワイシャツに胸元には赤いリボンをして、黒のロングスカートを履いていて、あたかも黒装束のようだった。

もう少し身長があつたらどこかの小洒落た古めの喫茶店の店員だった。

「ずいぶんとまあ開口早々失礼なことを言うやつだな。というか服どうした？買ったのか？」

その言葉に対して夕顔は首を横に振った。

「違うよ。なんかね。新が服がそれだけじゃ可哀想だからって、なんでも昔着ていた服でもいいならってくれたんだよ」

「へえ」

こんなこと言うとアレだが見かけによらず子供の世話もちゃんと見てくれる人だと思った。

あとでお礼を言わなきゃな。

「夕顔。ちゃんと店番やって……なんだ彬。今日は客か？こっちはいいバイトが入ったから、お前が別段必要というわけじゃなくなつたんだが」

その言葉に俺は目を丸くした。

「新さん。もしかして夕顔を雇ってくれたんですか？」

俺の問いかけに別段驚くわけでもなくそうだよと普通に答えた。

「お前が大学に行ってからこいつと話してたんだが中々いい話相手になってな。店番位は出来るだろうから、ならいつそ住ませてやる分はきっちり働かせようと思つてな。だからその服は私からのバイト記念みたいなものだよ」

「そうっすか……というか夕顔のことえらく気に入ってますね」

俺の言葉にああと頷くと少しシニカルに笑った。

「お前よりよっぽど頼りになる気がしそっだ」

「その言葉は軽く流せないですね」

このままいくと俺の立場は夕顔にとって代わられるのもそう遠くない日になつてしまつたろう。

そんなことを考えていると、伏見講にかかつているいかにも古いつて感じな時計から鳩が出てきて、軽快なメロディが流れてくる。

「もう七時だな。……彬。佳澄んとこに連絡しといて。八時から始めるつて」

俺の方を振り向かないで奥に入ってしまった。

珍しいな。新さんが時間を指定するなんて。いつもだったら、今から始めるとか言いそうなのに。

新さんの真意は分からなかったがとりあえず橘の所へ電話を入れておいた。

幸いなことにワンコール目で出たので『来い』とだけ伝えて、早々に電話を切つて、伏見講の外に出た。

後ろ手で扉を閉じ、空を見た。

秋とは言つてももう夜になると肌寒い。

いきなり半袖で出た自分を呪いながらも、すぐに、寒くて帰ってきたと言つたら夕顔あたりに笑われそうなので、そのまま俺は歩き始める。

行き先は特に決めていない。

勿論俺にも今日の宴会の準備があるからそんな遠出する気はない。出てもせいぜい十分位で帰れる距離にするつもりだった。

「ん？」

駅の方と反対側の夜はあまり人通りが少ない住宅街の方で何かの音が聞こえた。

なんだろうか。耳を澄ましてみると、何かを硬いもので擦っているような類の音が聞こえた。

こんな時間に誰か左官でもしているのか包丁でも研いでいるのかという音だ。

「触らぬ神にたたりなしっていうけどさあ」
だめだ。

こんな時に限って野次馬根性が働いた。

俺は、音がする通りの方に足を向ける。

意を決してその通りに出てみると、俺の予想に反して何もなかった。

もしかしてこの通りから聞こえたというのは気のせいだったかもしれない。

少し拍子抜けだった。

その時、俺のポケットが光った。

この通りの暗さとは対照的な明るさで携帯が光っていた。

電話が来ているらしい。

誰だろ？近くにあった壁に体を預けて通話ボタンを押した。

「はいもし……」

「遅い。どこほつつき歩いてるんだ。お前が来ないから始められないじゃないか」

電話が繋がるとともに新さんにそう早口でまくし立てられた。

そう言われて携帯の時計表示を見ると俺が伏見講を出てから二十分も経っていた。

こりや怒られるのも当然だな。

「すいません。すぐ戻ります」

「ああ。是非そうしてくれ。私だけではこいつらを抑えられ……ちよっ、分かったから、代わってやるから……」

どうやら向こうは大分騒がしいらしい。新さんの後ろから夕顔の

声が聞こえた。

「遅いよ彬。キミがあまりにも遅いからてっきりバラバラにされちゃったかと思ったよ」

「そうか。期待に添えなくて残念だ」

俺の答えに少し笑うと、早く帰ってきなよと言って電話が切れた。しかし、あいつはふざけて言ったのかもしれないが、昼に修一にあの動画を見せられてからだとなかなか洒落になってない。

俺は、壁から身を起こして裏通りを抜けると帰路を急いだ。

10月20日（前書き）

一 応漢数字と算用数字には意味があります。

10月20日

——十月二十日午後三時

「うーん」

意気揚々と駅から出たのはいいけど、いかんせん私は自分の状況を理解するのは苦手らしい。偶然見つけた公園のベンチで腹ごしらえとしてコンビニで買ったパンを食べながらそんなことを考えていた。

「大学まで遠すぎでしょ」

そりゃ、電車で揺られれば四十分もあれば着くかもしれないけどさ。

私的にはさっきまで三時間位電車に揺られてた身としては勘弁願いたい。

でも電車がだめとなると、タクシーってことになるけど、それじゃいくらかかるか分からない。

私の財布には福沢さんが一枚しかない。

つまりこのことから導かれる私の行動は……

「よし今日は家に帰ろう」

どうやら私の意思は薄弱らしくついさっきの考えをあっさりと翻した。

ここから家までなら少しかかるけど歩いて行けるだろう。

久々に都会の風景を見ながら帰るつても乙な行動かもしれない。頭よりも先に体が我が家に向いた。

幸い今日は曇っていてそんな汗をかきそうに無かったので好都合だ。

ここら辺で一番都会らしいとも言えるスクランブル交差点を通りながらそんなことを考えていた。

スクランブル交差点はこんな時間でも騒がしい。

人が歩く音、誰かがしゃべる声、車のクラクションが響く音。き

つとここで誰か居なくなつてもここは騒がしいままだろう。

そんなことを考えていると次第に都会の喧騒から離れていた。

私の前に長い坂道が見えた。

私はそれを心臓破りの坂と大仰な名前をつけていた。

だつて長いし傾斜が急なのだもの。

いつも通り途中の電柱で手をついて一息つくと私は家と家の間の隙間に何かがあるのを見つけた。

何だろ？ 誰かここに落としたのかな？ 好奇心という親切心とは無縁の心で隙間に入りこんでそれを拾った。

「なんだろコレ？」

一見すると人間の手に見えなくもない。

よく出来たマネキンにも見える。

マネキンにしては質感も随分とリアルなのだが、最近のマネキン事情なんて知らないのでもしかしたら、今は全部こんなものかもしれない。

「でも、人形にしちゃありアルよねえ。重いし」

持ち上げると、ボロッと先の方が崩れた。

崩れた断面を見ると、骨やら、血管のようなものが見えた。

ありや本物だ。

触ったことがないから分からないが、恐らく死体を触ったらこんな感じなのだろうと思う。

その地点から更に路地の奥を遠目で見ると何か落ちていた。

その何かの周りには素人目で分かる位致死量を超えた血みみたいな赤い液体が飛び散つて少し臭った。

これがちの匂いと言うものなのか。随分と頭がクラクラする。

つい二日前に仏に会つたつていうのに今度は知らない仏さんに会つてしまった。

こっちは綺麗に棺桶にしまわれてなくて仏つていうよりも本当に人の死んだ体に近かった。

私はぱつと手を離して空を見た。

先ほどと変わらず空には雲が厚く漂っている。

このまま見て見ぬ振りをしてもいいんだけど流石にここで見捨てると最近死んだ父親に呪われそうな気がするので、手を離して隙間から抜け出すと携帯を開いて小学校で習ってから一度も押したことのない番号を押した。

数コール後に向こうから反応があった。

あーもしもし警察ですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349x/>

ワスレモノ

2011年11月10日11時01分発行